



琴

九

第

銀鈴第九號掲載目次

(禁轉載)

俳句(俳句).....洲洋等	金矢(短詩).....東岳等	ひらさ記(小説).....中村荷影	素風哀風(俳句).....千江選	戀すれば(短詩).....川上櫻翠	巖頭微吟(長詩).....奥原碧雲	秋五句(俳句).....文學士藤川千江	靜夜の思(美文).....多田東岳	晝と夜(長詩).....平野萬里	挿畫.....增野翅白	表紙繪.....杉浦朝武
短詩.....河野翠激	寄贈新刊.....	うしろ影(小説).....大屋桂水	詩集「吉備姿」(批評).....翠激生	短歌小評(批評).....たちばな	七ツの灯(短詩).....增野翅白等	新日本の理想(評論).....千代延松壽	水の里(短詩).....支部咏草	孤吹(長詩).....有松曉衣	東遊詩(漢詩).....山路石水	



晝と夜

銀鈴

第九號

明治三十九年
一月一日發行

平野萬里

半圓空に廣がりと

黄金光の夕映や

西のかた炎々と

晝の宮居や焼け落つる

時とこそ知られけり

さかる火勢にあふられて

幾千萬の精霊や

天上に仆ふるらむ。

もとより人に非れは

叫喚の聲もなく。

猛火衰へ、とほへて

宮居はまたく滅びけり。

金色は灰色に

夜と稱ふるれくつきは

むくろらを掩ひけり。

さはれ常世の大神は

散りし火の粉をそのまゝに

光ある星として、

晝の宮居をこのはらめ、

れくつきを照さむ。

静夜の思

多田東岳

鐘はなりぬ。八ツの鐘はなりぬ。一度は高く、一度は低く、谷に落ち、水を渡り、はては山を越えて、あすの瘦骨また肥やすべく、さらば温泉の客、さらば今宵と、切々、又切々、響きは縷の如く行きぬ。

人の聲、足の音、さては嘈々の湯流れ、こゝ一時町を賑はせて、何れも同じ此處如き地の、今宵嘔吐の痲漢罕に、やがて静かに、いと静かに、たゞ涼々の谷の音のみかよひぬ。

八ツの鐘落ちて静けき温泉の町や谷の水の音

夢さをひくる

夜は更けぬ。水の音は牙ぬぬ。をかしの音や、うれしの水や。われ汝が歌に憧れ、汝が性を愛すること、こゝに幾とせ、嘗ては、竹をめぐりて嘯ぎ低うゆく汝に、心湖あへぐが如く波立ちて、このまゝ、汝に化せむを、泣き暮し、もありき。あゝ、汝よ。汝の若くしかく萬有を利して争はず、衆を惡む所に處つて、源泉混

々、捨てず、廢せず、恬然として陶々うたひ遊くそのさま、大塊の精をうのまゝに、われにいひ知らぬ幻影を認めしめ、われに限りなき教訓を暗示するもの、思へばまたなき恩者なるかな。

物憂、慘憺の灰色は、人を世を描きて已まず、一過の靈光認むるを忘れて、人は世は闇ふみて知らず、盲なるかな。瞽なるかな。

谷の音はいよ、牙ぬぬ。思へばわれは一夜の遊子、かくてなほ、黙思を友に、こゝに來し身の今宵ならぬを、いかなればかくは思ひながさぞ、夢さをふ水のうま音もあだに、目は牙ぬぬに牙ぬぬかへりしぞ、是非もなき。

反側多時、露まどろむすべもあらねば、蹶然起つて戸をやり、欄に凭りぬ。山は黒う面を掠めて儼然として立ち、銀河は影牙ぬぬて星斗燦然として天に懸りぬ。美はしの極みかな。さらば山よ永久に其の姿を變せざれ。星よ永久にその光をかくさざれ。かくてわれをして永久に瞻望せしめよかし。

萬籟聲死して、靈にかよふ露の悲鳴のほか、時に、脚下に響く谷の音の程遠く聞かるゝのみにて、やがて

●五

へば、やがては衝かむ大塊のはて、かくて安けく御手にかへるべし。況へ、力あれ。かくての寂滅、それ樂まむ。

(終り)



秋 五 千 江 句

それか今呪ふに似たる星明り欄黒う山迫りく

る

あゝサタンよ。さらば呪へ、祈れ、力あれ。かくてこの世を擧げて、汝が眷族の跳梁に任せよかし。豕となりて一日を快樂の理にあこがれむより、人となりて百年を悲哀の谷に呻吟するに如かざるなり。この世の球に跡づけし、刻はいかに淺く、臚ろならむも、また永久に消ぬず、朽ちざるべし。一脈の靈光うちにかよ

月出で、木小屋の闇や蕎麥の花
洛に來て東西わかず揚花火
小狐の芒へ遁ける野菊かな
高札を松に立て去る百舌鳥の聲
藥さして眼を閉ち居や今朝の秋

巖頭微吟

奥原碧雲

日の神西にかくろひて
闇のどばりのたなびけば
北溟とほくうちよする
浪をわが世の友として
苔のころもに汐のはな

み胸のかざり御統の
球とくだくるたが潮の
汐の八重路のすゑどほく
遠鳴すなる幽韻の
自然の樂にふけりつゝ

百戦の功いまとけて
銀髯しろき老将が
陣頭たかく立てるごと
萬古動せぬ岩が根の
名にさざみたる鼻線の巖

人と住まひぬ山に二とせ

こよひまた心たゆたひ君を見て十日
の月をめでゝかへりぬ

山の夕なほありし世の君しのび小雨
に摘みぬ百合と桔梗と

あなさびしいくたび秋のうれひへば

相見し春のむかし歸らむ

切に思ふ斯かる夕に頬をつたふ涙し
なくば胸の裂けまし

次號投稿締切一月三十一
日投稿諸子は嚴重に之を
守りてたまはむとを望む

戀すれば

川上櫻翠

戀すれば物に狂ふや忘れてはわれよ
りわれに文かきて見る

山襟や月をし見れば海こひし海をし
戀へば君はおぼるに

ささの日に人の戀ひける若やぎをみ
づから思ひさびしや在りぬ

やはらかうふたりが魂は抱きけり笑
とゆらぎの胸のみそのに

雅文字やみ文いだけは黒髪影とし
見ゆれ胸はゆらぎぬ

ものいふにいらへしもせず笑もせぬ

素風哀風

千江選

破れ垣に山茶花淋し國分寺
百舌鳥鳴くや狭霧晴たる麓道
裏金の陣笠光る霰かな
行秋や障子に映る鳥の影
焼米や紙に捻りて帯の間
古罽で辛棒したる別れかな
飯を干す旅に夕日の落葉かな
夕霧や濛々として風の窓
打ち開く讀書の窓や星月夜
新米や扇の上に一つかみ
柚味噌焼く今宵俳友来る頃
まぶしくと落葉踏む行々野干哉
菰垂れて念佛申す冬籠
藪陰に馳の糞の落葉かな
里御所の築地くねたり歸り花

寺南
波舍
南翠
紅山
九菊
花楓
井鯉
静月
浪男
岸泉
木靈
晴江
死骨
東岳
自來

むらさき

荷影女史

(上)

風も寒う雪もちらく降つてゐるが、さすがに春は長閑である。いさゝさした門松、ゆらぐ七五三繩、さては道行く人たち皆陽氣らしいものばかり。うた歌ふ聲、笑ふ聲に交りて、こゝかしこ聞ゆる中に、さりとては又不思議や、低き杉垣の内より洩るゝた題目の聲。「もう一ぺんまゐりましょ」一人ごちつゝ出たは、更に不思議、年浦若い女である。がた／＼ふるへる色なき唇より、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

紫リボン、紫シヨール、紫の手拭、紫の袴何から何まで凡て紫盡しである。顔を見ればどんなに見積つても、どつて二十は越すまじ、追羽子毬遊び瓜あげど、陽氣極る中を妙に沈込んで、下駄の緒の紫が少しぬれたのを見つめながら、例のお題目唱へつゝ進む様は、どう見ても不思議である。と見る向からハイカラシヨール、縮緬其他流行物を我後れじと見よがしに、肩に纏ひながら海老茶のひとむれ。中に小豆色縮緬のを纏へ

ま、なんだかすこいやう。袴をとりて紫の被布をひんよく着流してゐる。やがて思ひ出した如く笑を浮べて、ましろき頬は俄にもぬて、もみぢせるよど見るや更に、更にかれは嚴として、一心にね題目をどなへ出した。はや日はくれ色ねびて、雨戸うつ風の音さへ淋しさう。折柄這入つて来たは、光子の父と母とである。「また信心かい、篠村さんのかるた會は斷はりなの。」とは母の言葉、つゝいていと父は眞白さひげをなでまはして、

「けさわれだけいつてよこしたのに、かるたもよしたのかい。こまるね。心を正しくする、品性修養の爲ですなどといつて、そりや實際日蓮上人を崇拜するを、わるいとはいはぬ。しかし、生徒としてれいとま乞のね正月だから、面白く遊ぶがいゝではないか。」

「ほんに今年は卒業ですこと。光子が妙にねとなびたぢやありませんか。」

なにかいどぐちをひらくべくつとむる母に、ひきかへ光子は極めて冷淡なもの。

「も少し待て頂戴、もう少しで千遍になりませすから。」更に三分間ばかりお題目を唱へる。まあこれが數ヶ月

が目ざとく見つけ、「ねや藤島さんが元日早々ねまゐりだわ」「まあ神妙なと」「何故でせうぢれつたいわ」「ねばわさんのやうですわね」それからそれへ傳へられて、視線は藤島光子のうへに注がれた。そして意味ありげなひとむれの冷笑と、唇を固くかみしめたる光子との間に黙禮は交されて後、かれは又うつむきがちの足を運ぶ。つゝいて制服制帽の學生の一隊、英語もて罵しりつゝ道を塞がんとしたが、宗教によりて安意を得たるかれは自若として進んだ。いかに信する所ありとはいへ、年若きにも似合はぬことよ。

(中)

廊下續きに西むきなる四疊の一室、これは光子の居室である。極めて靜に、極めてしづんだやうな部屋のさま、ふるびた日蓮上人の肖像に古銅の花いけ、これには水仙が一輪さしてあるばかり、頗る抹香くさい。そのまへに一開張の机、塵一つとゞめず文具の外には、形ねもしろき香爐のゆかしげなのが置てある。よこには物語めきたる書籍いくさつ、金字いりや、よこ文字や、どころ正しくならべられた。へやのまん中に、机にも向はず立ちもせせ、坐禪をくんだやうな光子のさ

●八

●九

前までみじかき袴に長き袖、小さき舞踏靴にかもからぬそぶりを見せて、活潑にあそびしとはどうしても見ぬないど、父も母もかは見合せてふかき溜息、やがてこちをむいて、

「やつとすみました。御免なさいね。もうね客さまはねかへりですか。」

「ね、御あいさつにいらしつやればいゝのに、なんといふまわ、かたくなでせう。」

「こまつたねんねいぢやの。」
親子三人のひつまとまじまじと、二つ三つたのしき言の葉交されて、さて光子のねもざしやゝひき立つた。得たりかしてしど、父と母とは、熱心に語り出した。卒業をまつて、かねて御こん意にしてゐる篠村文學士のうちからね嫁にどの事、幸ひ松のうちに約束だけでもこのことで……。光子はまたね題目を唱へだし、箸にも棒にもかゝらぬ体。一座またもどにかへつて、しめやかなる空氣にみたされた。

(下)

厭やいや、どうしてもいや、お嫁さんなんかいやだわ。又しても顔は萌出した。夫から夫へと近き音を思ひ出

で、ますくかほはほてつて火の様、一所懸命に
題目を唱へてしづめんとすれど、耳まで赤くなつてく
る。ぬいつそ、かねて信ずる法華寺へいつて、たみ
くじをひいて頂いて定めやうと、例の紫づくしのいで
だち、何故こんなに柴がすぎだらうと、我からつぶや
きつゝ、けされまゐりせし道を辿つた。夜風身にしみ
て、法華寺の大松の木はみゐてゐるけれど、なか／＼
遠い。やつと石段を登つて見れば、わづか小門が一つ
あいてゐる。今夜はねまゐりが少いこと。ふみなれた
石板のいくまがり、小さき堂にれみくじ箱の安置して
あるもどに來た。どうか一生の大事よと改めて、れ題
目を百遍唱へて、さて格子に手をかけて、銀貨一つ落
しながら聲も低ふ、あのねみくじを……。
うちから、はーいと氣の長い返事。やがてがら／＼と
音して「四十四番……半吉、願望の處で身分不相應
なのぞみですが、しかし、なんざしたあとはよろしい
、方角は西、旅行は行先よし道にて難あり。婚姻は調
ふよろし後にこまるとあり、待人は……」『あゝも
うよろしうござります、ありがたう』と來しにひきか
へ、いさみたる足音であつた。れいの四疊へかへてい

金矢

多田 東岳

山なれど谷の音さけばまぼろしに浮きぬ浮か
びぬ君がある磯

山一つ金矢射ぬかぬ朝明や谷をねばろの湯氣
窓にくる

爪立たば見ぬもすべきを松一里思ひある磯ふ
みがてに過ぐ

この波の何處へつゞく秋日和三十五反唄のせ
ている

西 枯萩

人はみな白百合呪ふ歌うたひ喪服つけたる暗
き街かな

よくお嫁にゆくことはよすことよ、のちにこまるな
んて、いやだわ。旅行はいいといはれたから、どうで
も決定實行することしよう。こゝに居ればどうして
も篠村さんへゆかねばならぬから……。そう／＼一
時も早く……。身支度と、のへし折は希望の光明にま
なこくらみて、老ひたる父母も、寒い風も、淋しい道
も、なんにもなくいさみいさんで出た。

* * * * *

針小棒大、れいの海老茶連の教室會議、運動場會議の
話題は、いつでも光子嬢の上にのぼる。

「紫がすぎたつたわけは、さめやすさとしてある。
曰く戀人を忘れぬ爲だとか、曰く手に手をどつて今は
九州に居るとか、緒に緒がついて、ぬらいものである
。だん／＼ひいて、はしたなき山の神の井戸端にまで
も、藤島の嬢さんがと、ひき出物の一つとなつた。
人のうはさも七十五日、殆んど忘れられんする折柄、
一説は傳つた。かれは長崎から上海へ渡り、今は北京
の某學堂で教師をつとむるかたはら、儒學研究に餘念
なしと。これが尤もたしかな事實らしい (なほり)

●十

●十一
人の名をあまた刻みし二の鳥居三の鳥居や花
崗岩にて

馬の上にならびかざして鬚を行く黒髪ながき
南部少女よ

高城 七星

木屋町や柳が中のおぼる月木遣をうたふ宵の
程かな

夕陽は無臺にならふ參籠の數十人と紅葉に照
りぬ

堀川や紅の雨する友儂の若衆たちは番傘さし
て

米村 水聲

東の赤丹色してさす汐に千鳥のさはざ海の
夜あけぬ

淀舟やしらくあけの西窓の夢みる人に千鳥
なくかな

汐ざわや柳にたちぬ夕千鳥さくも磯邊の人三
五人

ねん胸にひそめるものを知りがたし秘諭たま
はむ吾にあらねば

船頭のいさかひやみてだみ聲のふなうた海に
霧する夜かな

木枯や一山並よみ四日頃の月は光りぬ古塔の
上に

一人居の淋しさなれぬ、初冬の時雨れて後に
月さす頃を

すめる夜の虫のやれ譜をもたらして秋風そい

三島溪雲

御胸の底のちまたに響かぬや亡滅日せまるを
よみの樂の

俳句

今朝の春戦勝百句ものしけり 洲 洋

松の内 我俗化して詩も成らず

元日や羽織短かき村の人 虎 三 郎

狼の聲聞きにけり冬の山 熊 市

雪の日のラムア毀ちし小姓哉 紋 三

山や水元日の囁のさしにけり 琴 月

幔幕に紅葉照るなり山館
横断す 瀛車や枯野の遠くして

ろ愁さそふや

沈みゆく夕日ながらに葡萄葉の輕う落ちさぬ
小窓の君に

ちひさなる淋しきものを得てしよりの皆か
をるわが世となりぬ

藏田信子

詫しむと君にかこちし日も思ひ、罪とかぞへ
て御前に伏しぬ

秋の夜やマルタと育つくはし女とつくられに
けり聖壇すゑて

袖とりて愛すとうたひやさ人に罪強ひたりし
日もありぬ去年

秋の堂牧師のさみを向つ座に八人ならびて聖
書さく夜かな

東游詩

石水漁夫

上京途次省母會仲秋

秋風短褐故郷天 一夜承歡勝百年 偏覺清光斯夕好
妹山當戶月團圓

瀛車中口號

日暮颯輪度湖阿 行人快意此時多 恍疑萬岳雄風起
一道長蛇捲地過

琵琶明月富峯煙 五十三亭縹渺邊 漫擬蛇龍得雲雨
一身飛上海東天

訪梨村中村君

十里大江水 煙波照醉顏 重爲京洛客 孤負故鄉山
身共秋風老 心同白鷗閒 夜闌相對座 皓月酒杯間

寄懷犀陽北村君

一別空經歲 再游握手難 浮生憐夢幻 塵海怯波瀾
把酒對黃菊 懷人碧憑欄 信山何處是 帳望白雲端

孤吹

有松 曉衣

老木は歌へ、狭霧がくれ、
鳩むせび啼く、山門にも、
沙彌が涙に、廻りし花、
有情よなごか、亡ぶべきと。

當時にかへる、口付紅の、
若枝に芽ぶく、美し姿、
俾しや霜に、小袖なれて、
櫻ぞ櫛を、ねたみ心地。

袖よなげさに、朽ちずもあれ、
櫛の廣葉は、諸手あはせ、
今朝佛の座に、落伏せるを、
僧が箒は、許さうりき。

水の里

(新涼會濱田支部
同 松江支部)

河野 素陽

冬ちどり砂濱道を行きがてに君とならびて聞
く遠音かな
水樓や千鳥が歌をたまへとて紅葉ながしの紅
絹まゐらす

福間 如舟

涙もおほみなけに倚りまつる翳き子なれば
おほひてあれな
行く秋を今のさだめを泣かれぬるみ啓示追ふ
にぞどひぬるかな

森 脇 桃 村

金色の美しさまよ銀杏の葉得べくばゆかむ君
がかたへに
南櫓に机して書く小春日や雲のわよひと歌な
りぬれば

あ、蓮臺の、座に近くば、
「永劫不朽」、花あらむも、
痛みの花を、眼のあたり、
僧よ説くべき、人世ならず。

見よ山を見よ、聞け風兒が、
妙なる歌に、吹いて行けば、
八百木は枯れて、花は朽ちて、
靈は南の、海に逝くを。

救ひても来よ、佛利あらば、
巢なきを歎く、渡鳥に、
暖温ひと夜を、得與ふべく、
千の爐焚くも、及ばざらむ。

(たわむれて僧に)

坂本 笑風

いもうとに聲のよく似し十七の女といふにた
いなつかしさ
笛の音やもみちかつ散る宿にしてもだへあれ
ばぞかなしと泣きぬ

後藤 孤星

しろがねの綱ゆら／＼と月姫は鳳輿ゆたかに
訪れにけり
川べりに鼓うたさく青簾君を背にして涼風よ
びぬ

立石 洲洋

あふけなくもみ光たびぬ詩も成りぬさいはひ
なりや戀も成りける
騎樂のま晝は飽さぬくれまらて月や如何にと
君をし訪はむ

松本 泣花

朝あけや島の少女のやさうたの青波わたりに
来しよ館に

秋ふけて霜ばしらす朝の野にさぬぎぬわぶ
る人と名負ひし

増野 翹 白

矢を負ひてれもひ然わけり瑠璃鳥のかけにか
くるい少女といへば

ねがはくば秋をかざると指そめよ森に殿あむ
小蜘蛛の如く (孤星兄にかへし、君繪の才あり)

同一の作を二三若くば四五の
新聞雑誌に投じて、以て得々た
る詩人あり。われ等はこの人々
の心事をうたがふと共に、正直
に讀む讀者の馬鹿らしさをも
憐まざるを得ず。……新開生

演じて、露勃たる霸氣を帯び來り、光彩陸離として遂
に今日の文明を致すに至れり。

翻つて本邦の状態を回顧すれば、我聖代の實祚長し
と雖も、國運多事にして、人事匆忙の感に堪へず。三
百年間泰平の夢に慣れたる徳川氏の姑息政畧も、活眼
活識の志士輩出の爲めに破綻し、島國的日本は、維新
の大革と共に、一大變動をなして、封建政度の打破、
西歐文明の輸入となり、日清の戦役は臺灣を領土とし
て地理的膨張をなし、日英同盟を結びては世界列強の
班に伍し、露國と鬯端を開くや、連戦連勝有史以來未
曾有の大勝を博し、皇國の勢威は腫々として旭日の天
冲するが如く、大扶桑國は儼として、東洋の濱に屹立
して、秋霜烈日の若く犯す可からざる堅忍不拔の意識
を五大州中に徹し得たり。

斯く西歐民族の數百年間になし得たる、文運の發達
國政の進捗は、僅々數十年にして完成せられんとする
に非ずや、歴史は繰返へすと眞に宜べなる矣、文明東
漸の一大波瀾は沸騰喧囂の中に、希望ある、名譽ある
新日本は、坤圓上球呱呱の聲を擧げたるなり。此時に
當りてや、吾曹日本國民たるもの、大和民族固有の精

大和民族の勃興を述べて 新日本の理想にれよぶ

松 灣

歳華茲に更まりて、一陽來復、青帝の駕は、瀝灑と
して天の一方に轟き、端雲飄飄平和の色を湛へ、五千
萬の同胞は、鼓腹擊懷天恩の厚さを歡呼して、寶壽の
萬歳を唱へ、國運發展の光榮を祝賀す。

熟々過去四十年間の行程を思へば、轉た歐州近世史
の縮圖を見るが如き感なくんば非ず、一面に於て、文
學、美術、宗教、科學の發達と共に他面、社會狀態の
一大發展を來たし、彼の北米合衆國が自由獨立の一大
旗幟を翻へして、共和國を建設したる如き偉觀を呈し
たるは、之れ畢竟、十五世紀の末葉より十七世紀にか
けて起れる、文藝復興、宗教改革の賜といはざる可か
らず。由來歐州の民は、羅馬教會の爲めに將たスコラ
哲學跋扈の影響を受けて、自家獨立の眞意を設了し終
はんぬ。されど、亞刺比亞的西班牙文明の曙光に觸れ
てよりルチサンスの機運に會するを得、或は國民文學
の勃興、自然科學の發達と合せて宗教改革の活劇を

●十六

●十七

神的立脚地を表明して、國民的自覺を爲さる可から
ず。

然り國民的自覺をなすべく、日露戰爭は好箇の教訓
を與へたり、先きには白人種をして黃禍を絶叫せしめ
今や國威大に宣揚して、我大和民族の一舉手一投足も
列國の注視を引き、往日の如き暴壓抑制を脱脚したる
と共に層一層勇奮せざる可らず、大に自信自覺を促し
たり、然るに我思想界の潮流、精神界の状態を考察せ
ば内心沮怩たるものあり、然なり暗黒といふ可からざ
るも、渾沌といふべし、今を去る千有余年の昔、儒佛
二教の入り來りて、本邦の文化を誘導し、以て東洋思
潮を形造り恰も日本固有の思想のそれの如くなりしを
維新の改革ありてより、西洋思潮の流注して爰に東西
両思潮の衝突を來たし、一波大瀾の湧出を見るに至る
、此の両思潮の調和を謀り融合を企圖し以て物質的文
明精神的文明相共に際々照し合せて、開國進取の實を
擧げ、新文明、新宗教の產出を計り、かくて文明史上
の使明を完ふするの覺悟なかる可からず、吾人は征露
役を以て將た日英同盟の擴張を以て甘心すべきに非ず
軍備の完成、財政の經營、殖民政策等あらゆる方面に

向つて活動し、地理的膨脹をなしては宇宙を併呑するの概あるべく、世界文明の趨勢を洞察しては一大新世界を作成するの覺悟なからざる可からず、斯くいふを以て誇張に失するとなす勿れ、徒らに壯言豪語を弄するとなす勿れ、吾人は大陸に生存せし民族の祖先を有す且つ大陸的人物を輩出したたり、而して儒に服せず、佛に屈せず、耶に降らずして大和民族固有の一大精神を發揮し來れり、豈自重せずして可ならんや、自尊せずして可ならんや、吾曹は大和魂即惟神の道を有す。

△本誌本號の表紙繪は杉浦畫伯の彩筆に成り、其天馬は恰かも本年が午の象、琴と燭とを携へたり。最下部の馬蹄は畫伯意匠の存する所にして諸子が等閑に觀ざらんことを望む。

七つの灯

増野 翹 白

奈良すぎて神代の卷はうかいひぬうつゝに戀
ひし天の香具山
旅ぞゝる塔にのぼりてはのゝぐと眉にあふぎ
ぬ大和彩雲
古杉や木立がおくの朱の宮の男鹿まねげば小
躍りて來る
藝術や佛かゝやく奈良の代を春日の巫女のう
たにまた見る
國寶と色にも蒼びぬ盧舍那佛こゝろ千年にあ
こがれしむる
奈良に行かばみ冠まわり集誦して上古の藝の
美も讚へませ
たゝへよる大極殿の朱の廊にかしこつたなき
詩彫らしめよ
あゝ古りし比叡のおは山加茂の水歴史に趣味
の巻しのばしむ

●十八

●十九

ねばしまに晚鐘さゝぬ清水や厨子に彩する堂
のともしび
うるはしき御袍細太刀槍の扇うつら牛車に藤
氏召しける
眉染めて櫻かざして永き日を詩歌あそびし遠
世を思ふ
京の女が日傘して行く仁王門丹碧見ゆる青若
葉かな
雛に似る祇園の宵の扇賣女小唄やさしう「召
せ夏忘れ」
古伽藍や鴨の流れや舞姫や友禪名所京に生ひ
し子
人麿の沓のかほりをしぬびけり藻盪やく子と
旅ゆく人と (以上十五首京茶屋の旅に歌へる)
水一里野菊真白の川ぞひややさ唄小六里に名
を得ぬ

立田 紅 翠

おぼろ夜やさめく街の灯をぬけて人となら
びぬ繪師がやどりへ

古川 雲 溪

きぬぎぬや小雨に明けし四條橋黄なる雷しぬ
柳ど人に
夜の京や脊高き人の影にそひ伏目にすぎぬ吾
は山をだち
梅雨晴れの夕雲うつる江はよろし矢がすり着
たる小舟の人

岡の邊や驚さくと立つ人に梅の林に朝の日さしぬ
山の宿やはら朝風三日の月照しぬさる寝のう
るはし人に

後藤 孤星

繪行燈や七つの灯して雨の宵女どうしが芝翫
をかたる

菊うゑて秀才まねびて弟が浪速の水の興話す

夜か

春晝やさすらひ人と京びとゝかたへ五町の

菜の宿にして

燭の火は奈落に生ひしゝろがねの蛇の三匹が

血を吸ふかたち

山本明星

み名やさし戀しみ歌の慕はしき雨の小窓にみ
姿れもふ

來ませしか眞萩めぐれる道にして吟聲ゆるう

み影も見ぬ

ながらふる二の世の詩の才ちさし胸をいだき
てうつむかれぬる

會ひなばと涙つゝみてさすらへる二十年行脚

のわれども見ませ

夢みては翅たびぬと笑まれぬる醒むる期なく

ば何なげくべき

藝術の犠牲とたびにし一人ぞとぬかづく繪師

のゑむ秋の朝

里わたりみな水きよき小車と音めでゝ行く初

秋の風

菅原 まさ勇

かく露の奇しき光明は消ゆ去りぬ秋草小野に
朝風にして

紅葉のごと織しき手もて心もてよる見いだけ

る美しびとよ

大塚 戀華

歌もなきちひさき身なり君まつとこほろぎ聞
きて涙流れぬ

世に泣かる人に泣かるをやみましぬ幸多き身
と思ひし君の
関ふとや君導かむすべ知らばよべ西窓に涙流
れじ

夢うつゝさびしう聞きぬ磯千鳥はた鐘ゆるさ

大海のくれ

君の手に詩の秘扉は啓かれて銀鈴なりぬわこ

がれの朝

夢にしてねん手はたびぬいだかれぬさめざれ

どはに夢なつかしき

立石 洲洋

地なる懸天なる人にまわらすと虹渡りますみ

神あふぎぬ

青あしに朝日ゆらめく水の國歌の三とせにわ

が戀なりぬ

みさとしに天童天降る秋にしてやはらぎみち

ぬ詩のかん國

福田 如舟

古瀬 露香

千歳もかくと誓ひし身を措きて君つれなくも

措きて往きにし

藤本 晩花

みいくさに死ねや弟みづからは母を奉じて里

にこもらむ

み手にしてうるはしき子と生ひたらぬたまた

ま罪の名負ひにけれど

△例により投稿数多く、其優なるものをのみ採
り、大半割愛するの止なきに至れり。長篇の小
説等をも亦多く省きたるを謝す。

△投稿は總て半紙全面を用ひ十行二十四字詰に
淨書せられたし。これ堆積の原稿を整理する上
に於て特に諸子の注意を乞ふ所以也。

詩集「吉備姿」

入澤涼月神尾江村合著

翠 激 生

貴著「吉備姿」頂戴いたし難有存じ候。別に「いかに見
るや」どの御仰せ、これまた承り候。むげに斥け候は
尤も禮なきわざと存じ候まゝ、思ひ寄り候一二を書いて
御來意に酬ひまゐらすべく候。

近頃詩集の刊行せらるゝもの頗ぶる多く、何れをそれ
と花菖蒲、ひとつとして美はしからぬはなきに、世の
評者たちは、真面目に味ひ給ふことなく、ひたふるに
貶したまふやう存せられ候ところ、こはまことに斯壇
の悪傾向とも申すべくやと存候。それはさて置き、「
吉備姿」が盛装を擬して出で候は、殊に嬉しく、貴兄
の「吉備姿」江村氏の「末摘花」何れも斯壇の一方を飾る
に餘りありとは、笑まれ候。

貴兄の作中、小生の特にめでたく拜讀したるは、左の
數首に候。

みだれては花どもまがふ彩鳥の翅にのせても
見たしわが戀
酔ふと見て御歌は胸に秘めぬよ秘めても悔

の長詩中多くの佳作を見出で候へ共妄評他日を期し候
。昧裁のよきは言はずもあれ、表紙繪の意匠落筆等わ
けて喜びし所に候。されどこちらたき序文序詩はわれ等
の興かる所に候はず。恐々多謝。

短歌小評

▲巻頭信子女子「袖几帳」もながらうれしく拜讀致
候。「南窓や」は艶麗、「西風や」は清淡、「うたは皆」
幽玄、「思ひわびぬ」は清怨、「今朝ひらく」は雅醇、い
く度か繰返して候。

紫雲氏の「夕千鳥」中「うす靄を」有明の「夕沙は」の三
首殊にめでたく、就中「うす靄」の情景兼ね備はれる、
流石この人よとうなづかれ申候。其他孤星氏の「ねん
聲は」洲洋氏の「生華の」どの國の「紅翠氏の「櫻がり」
永劫に」水聲氏の「十人の」等何れも高きみ歌なりと存
候。編輯同人たちの歌はわざと小評を控へ候。

「銀鈴」の歌風、漸次多方面に涉りて努力の實を擧げら
るゝを多謝致候。(大ちばな)

ひぬうき戀の夢
地に臥してたるがめばさて遠きかな我身容る
べき星と思ふに
小草ふく風に夢乗せうれひのせ虫とわれ泣く
秋の夜の雨
夏衣そでふく風のしめやかにまたさそはれて
戀の國ゆけ
ほどいぎす今宵も欄の人をさまし夜舶の舟の
灯を掠めゆく
うらゝかや野の暮遙か試樂の日笛吹く人の音
も清うして
いつの世か見しと人も見われも見てあやしき
まゝに戀なりにけり

右はたゞ小生の嗜好に慍ひし秀中の秀のみを抜きたる
ものに有之、自餘の數百首いづれも美はしく拜誦いた
し候。或は熱烈燃ゆるが如き戀愛を歌ひ、或ひは神秘
の威なるを詠み、艶麗なる、清怨なる、壯嵩なる、繊
細なる、一として三誦に値せざるは無く候。唯假名遣
の誤りか但しは植字の謬りか十數ヶ所に微瑕を見受け
たるは多少心苦しく候ひき。その他貴下れよび江村氏

寄贈新刊

■新文藝 (二ノ十二) 岐 卓 新文藝社

地方雜誌としては、内容外形共々整へるもの也。「文士の書齋」に
多くの讀者に喜ばるゝ記事。(定價六錢)

■あこがれ (第二) 米 子 あこがれ社

咀華、葉櫻、水聲、雪兎、馨子、春濤、青鈴等の稿
を載す、其太だ誤植あるは憾ひべし。(定價四錢)

■しづさ (二ノ六) 愛 媛 シズサキ會

俳句専門の雜誌也、俳傑子規の出生地を發行するといふ。(定價六錢)

■青 春 (第六) 東 京 青 春 社

新聞形印刷の雜誌也。泰西の名畫見るべし。(定價五錢)

■新 韻 (二ノ二) 松 江 新 韻 社

所載の俳句見るべし。次號より更に刷新を加ふる由。(定價五錢)

■西行上人の歌「文學士の作」としては呆氣なし、所論
概ね平凡。東岳、松濤、紅翠、枯萩、馨子、正光、
洲洋、水聲、峯秋等の歌見るべし。新体詩は悉く駄
作。吾人は今少しく材料の精撰を望む。(定價拾錢)

■懸 葵 (二ノ九) 京 都 懸 葵 發 行 所

俳句作の人々には亦興味ある雜誌たるべし。(定價八錢)

■少 年 團 (二ノ二) 岡 山 奥 田 金 正 堂

少年雜誌としては林裁善し。編輯の完備亦尠可らず。(定價六錢)

■柳 笛 (三ノ一〇) 松 江 報 社

例に依つて紙面にぎやう也。吾羽羽風諸子の勢多とす。(定價六錢)

■北濤文壇 (二) (定價五錢) ■少年文壇 (五ノ四) (定價四錢) ■若
さくら (二) (定價四錢五厘) ■少女新聞 (三ノ二) (定價四錢) ■廣
告新聞 (三) (定價三錢) ■北星 (二ノ一) 非賣也 ■滑稽新聞 (二)
(定價二錢五厘) ■曳馬の友 (二ノ九) (定價三錢五厘) ■すゝか (第七
卷) (定價八錢) ■修文集報 七四 ■成田圖書館報告 (九) ■北
濤新聞 開攝陽

廣告

關西唯一之少年雜誌

每月一回 定價 郵部金一 部金五 錢六

每號懸賞文募集ありて少年諸子の投稿を歓迎す
本誌は趣味と實益とを兼ねたる好雜誌
にして、少年男女諸子の良友たると共に
に家庭に於ける好同伴たるを期せるも
のにして、**體裁優美、内容豊富、定價又廉**なる
は尙かに本誌の江湖に誇る所なり。

發行所

岡山市 西大寺町

奧田金正堂

發行所

下縫國酒々 井町上岩橋

文學會

文學雜誌

北濤文壇

毎月一回廿日發行 十一月廿日號既刊

●會員大募集●

會費

三ヶ月前納十七錢 ◎六ヶ月前納三十二錢 ◎入會金三錢 ◎郵券代用五厘又一錢ニテ一割増

内容

◎論壇◎小説◎小品文◎隨筆◎紀行◎懸賞文◎詩歌俳句交詢等にして体裁亦頗る優美表紙石版摺

每號懸

賞募集あり 雜誌見本及會期入の方は切手六錢封入御申込を乞ふ

發行所

能登輪島 宇野河井 北濤文學會

うしろ影

第一

河野翠 漱

煌の身君が紅さしの

指にかがやく許されか

さては遠海のみなぞこに

吾世沈みて朽ちたさに

玉にならばや

眞球の玉に。

二十五絃

「ね、君、情熱のほとばしる所は、全たく盲目だね、行為が善であらうが、又不善であらうが、それ等を考へてる暇があるものから。倫理に支配される戀愛は、君、眞正のものぢやあるまいぢやないか。」
友はそのしなやかな右手を卓子の一端に置いて、相對したる余に、輝やさを帯びた瞳を据

ねて、舞とばかりに廻つたのである。

眉目秀麗、年紀二十有三、友は高等學校の俊才である。背廣は紺の霜降、カフスは奇麗にひらめいて、手を動かすたび、青葉の中を白蝶のちらくくと、纏へるが如く見わた。

「うむ、解つた。だから君は、其自由なる戀愛を擇びたまへ。僕は君の幸福を祝福しやう。」

友は嬉しさに、無邪氣な顔に満面の笑を堪へて、

「多謝！愛が両性の間に成り立つたと假定して、それが不完全な社會のために、妨げられたとすれば、これ程不幸なことは、凡そ當事者の生涯を通じて、有るべきであるまい、併し——。」

と、友は高く左手を舉げ、透き通るばかり美はしい五指をゆつたりと伸して、そのまゝ再び卓子の上、静かに下ろすと同時に、

「僕は實際斯う思ふね、夫の情死た、情死ほど美なる行爲は、人生に雙つとあり得べきものでない、こりや斷言するね。」

ぢやないか、君は何う思ひます、君は——」

●廿六

外は雪ふる音がして、カーテンの隙から白いのがふわふわとするのさへ、ガラスを透して敷へられる。ストーブの火は勢よくはねて居れど、寒さは靴の指尖に逼つて、洋服の背がじわくする。夕暮の室内は、うつすりと暗い。

●廿七

第二

「ぢや君は、その恐ろしい情死をも、美なるものと信すればこそ、敢へて爲やうといふのだね。」

「そうだ。」

と、友は頗ぶる我意を得たりといはぬばかりに、奈何にも愉快に見わた。

「あゝ、思はず馬鹿な議論をしたものだ、死ぬるといふ前に……。」

友は斯う言つて淋しげに笑つたが、
「左様なら。」
と突然に立ち上つた。

余は彼が甚たしき情熱家であるを知つてゐるので、言葉を盡して——情死の非なること、社會は君が思ふほど冷酷なものでないといふことを諄々と論じた。

「解つた。ぢや社會は、僕の欲する戀をも許すでせうか、確かに？」
 「許すすども、それ程熱心なものが何うして制せられるものか。」
 「爾うか。そうすると、情死は案外價値の無いものだね、や、よく解つた。」
 再び立ち上つて、

「もう暮れるから、出更へるとしやう、失敬しますよ。」

「あゝ、販るのかい、晚餐を俱にしやうじやないか。」

「難有う。併し——失敬するよ。」

と友は早やドアを開いて戸外に立つた。雪は降る、風が寒い。
 歸り行く友の後ろ影は身に泌みぐくと淋しげであつた。

超えて一週間の後に、あゝ友は情死を敢てしたのであつた。余は實に思ひ當る！而して渠
 のために余は、男ながらさめぐと落涙した。
 この上書く勇氣もないが、情死した一方の女、それは實に斯くいふ余が妹であつたのだ。

●廣告

謹賀新正
 丙午元旦
 新涼會
 銀鈴社

謹みて新年の祝詞
 申述べ候
 銀鈴社編輯局

丙午元旦
 河野翠
 千代延松
 大屋桂水
 佐々木朝風

謹賀新年
 丙午元旦
 新涼會
 松江第一支部
 濱田第二支部
 米子第三支部
 大東第四支部

河野翠著
 杉浦朝武畫
 短歌零話
 全 一部實價拾五錢
 郵 稅 貳 錢

内容概目
 ▲歌と何ぞや ▲神來 ▲歌の用語
 ▲櫻翠の詩 ▲空想 ▲難解なる詩
 ▲風 ▲萬里の詩 ▲戰爭詩 ▲島根詩
 ▲人 ▲平易なる歌話等
 發行所 島根縣邑智郡田所村 銀鈴社

明治三十八年十二月廿七日印刷
 同三十九年一月一日發行
 (一册前金拾錢)
 (六册同五拾五錢)

編輯兼發行人 河野 碧 雄
 島根縣飯石郡赤名村大字赤名
 八百三番地
 印刷人 木村 柳三 耶
 同縣同郡同村大字同二百八十一番地
 印刷所 赤名活版所
 島根縣邑智郡田所村

發行所 銀鈴社
 △廣告料一行貳拾錢、半頁貳圓▽

河野翠激

金泥きんぬいに高山たかやまかざる初日はつひの出でこぼれ櫻さくら
の彩あやしぬ水みづも

佐々木朝風

里さとは老おいよ山やまは古ふるびよ三冬さんとうの安やすき睡すまい
も我われに適あはへば

大屋桂水

大海たいかいや朝莊あさしょう嚴げんの響ひびきして樂らく鳴なり出いで
ぬおはん光ひかりに